

い え ば 角 が 立 っ け れ ど

— 農 事 随 想 抄 —

全農 肥料農業部
肥料技術普及課長

岡 本 信 行

実体からかけ離れた言葉

言葉は慎重に選んで使わなければならない。雑に扱っているうちに実体から離れ、真実を伝える記号でなくなってしまうからだ。例えば有機農産物。有機農業信奉者の新造語である。自然農法とか有機農法といっている間は実体があったが、有機農業となり、有機農産物というに至っては、言葉のための言葉でしかないと思うがどうであろう。

有機万能というが、各種の有機物資材(彼らは無機質肥料の反対語としてこれを有機物資材という)のうち、家畜ふん尿と各種有機物汚泥は、膨大な量が排出されるのに、まだ合理的な処理方式が確立されていない現実を、彼らはどう理解しているか。重金属含量を著しく減らし利用しやすい形に変えたとしても、資材によって作物養分の含量に大きな幅があるために、最近の施設土壌にみられるように、塩基の過剰やアンバランスの問題が起っていることを知っているのだろうか。

良質の有機物とは具体的に何であるかを問わず、どのような土壌条件の場合にどれだけ入れるべきかを問わずして、無機質肥料は有害であり、有機質肥料(有機物一般を指す)は有益であるという。現実的な対策のレベルで議論すべき事象に対して、不適切な言葉を無造作に使い、切って捨てる。私はこれを暴力という。科学的根拠にもとづかない一方的評価に反論する術を知らないから。

テレビ報道の波紋

新聞、雑誌にとりあげられたことなら、形に残るのですぐとりよせ、内容を確かめることができる。意見を述べ見解を書くのにそう手間取らない。いやらしいのはテレビである。

テレビニュースをみた人から、あれはどういうことかと聞かれても、みていなければどうしようもない。画像は消えてしまうからである。活字とちがって、テレビは受動的に入り込む情報だけに、その影響力ははかり知れないものがある。報道側は演出自由だし、世論操作もできる。「みた人」の問題指摘だけに頼って意見を述べる

ことは危険である。受けとる側にも先入感がある。

最近土壌改良資材の話題が二つ報道された。一つは効能を誇大宣伝している資材が情報未整理の状態で見られた。他は農林水産大臣登録の肥料で、30年も大いに役立ってきたものを、たった一つの実験で疑問を提出した学者の発言が全国ニュースで報じられたのである。

世の中が平和で大きなニュースがないのは結構であるが、とくに後者のような不用意な報道によってひき起こされる波紋は大きい。混乱だけがあとに残るマズイ報道といわざるを得ない。

捨てられる資料はつくるな

さまざまな資料が毎日届けられる。複写機が発達し、何でも手軽にコピーできる時代だから、やたらに手持ちの資料が増えてしまう。適切な対抗手段は上手に捨てることである。業務上必要な資料、個人的に興味のある資料は保存するが、あとはあまり時間を置かず捨てる。情報整理する立場を無視した資料は捨てられやすい。

私にとってA4サイズのコピー資料はとくに始末が悪い。2~3ページなら2つ折にして封筒に入れるからまだよいが、分厚いものはとても保存する気になれない。保存しにくい資料は、要点をメモし、必要な図表を切り抜きする。カタログは豪華さを競うのでA4が多い。しかも厚手の紙を使いたがる。これもハサミとのりで処理する対象になる。豪華に見えるものほど内容がない。

私は切り抜き情報はB5の用紙にはりつけている。切り抜きも、他の資料といっしょに分類して、封筒に入れて整理している。

情報の受けとり方

情報整理用の小道具の一つに情報カードがある。いまはいろんなサイズ、厚さのカードが売られている。私はとじ穴のあるB6カードと、5×3(インチ)と呼ばれる小さなカードを使っている。いろんな用紙を試した末にいまのものに落ち着いた。以前はB5のルーズリーフも使ったが、いつの間にか止めてしまった。B5いっぱい書き込むほどの情報はめったにないからだ。

私がどういう小道具を使って情報を整理しているかを

書いたが、大切なのは小道具ではない、どのように情報を受けとるかである。ここは私の出る幕ではないので、詩人の鮎川氏に登場してもらおうことにする。

「あまりこまごました情報に捉われて、大局を見誤らないようにしなければいけない。……情報の受けとり方を誤ると、どんなすぐれた論理家でもとんでもない方向に導かれてしまう。情報錯誤は、論理錯誤以前の問題だから、さまざまな情報をいかに整理して、正しく把握するかが大切なんです。……情報を整理する上では、実際にその世界を生きた、体験した人の、信用できる人間の言葉を聞くのが一番いいんじゃないかな」(鮎川信夫著「私のなかのアメリカ」大和書房)

新肥料開発への期待

最近新肥料の開発が人々の話題に登るようになった、肥料メーカーの間で気運が高まっているといってもよいようだ。

国際競争力を失い、構造不況にあえぐわが国無機質肥料工業は、いま過剰設備の廃止、業界の再編成などきびしい合理化の道を歩んでいる。だから、悪い環境が長く続いている肥料業界に向って、新肥料開発への投資を正面切って要望することは、まだ大変な勇気が必要である。

企業努力によるコストダウン(生産性向上)が最優先される環境下では、表面的には「開発」はタブーになってしまっているように見える。関係する化学工業や食品工業において、肥料の将来を夢みる経営者は、経営者その気にさせるだけの情熱と実力をもった研究者の出現を心待ちしている。私はこの気運の高まりに拍手を送りたい。

業界をリードする大手企業が10年経っても革新的な製品を出せないようでは、その分野では活力を失い、リーダーの座から脱落するだろう。肥料業界でも、新規分野の開発に手を出すのもよいが、本命の肥料の開発を諦めないでほしい。

全農では、官、学、農の関係者をメンバーとする肥効率向上技術研究会を年3回開いている。無機質肥料の新規開発を促すこともねらいの一つにしている。これまでの実施テーマをみればこのことはお分かりいただけよう。

研究会テーマ

1. リン酸の過剰問題について(56)
2. 耕地土壌における塩基バランス(56)
3. 施肥位置に対する考え方(56)
4. 脱窒の農業上の意義(57)
5. 微量要素とくに亜鉛について(57)
6. 加里肥料について(加里の肥効問題)(57)
7. 樹皮堆肥の効果(58)
8. 硝酸態窒素の施肥効率(58)
9. 液体肥料について(58)
10. リン酸吸収率の向上について(59)

(カッコは年次を示す)

研究開発を妨げるもう一つの壁

人は「新肥料」にどんなイメージをもっているのだろうか。アンケートしてみたいことの一つだ。あるいはどこかの広報誌で、尻取り遊びのように、前の人の意見に触発されて他の人がこれに応じる形で連載したら、座談会とは趣のちがった深みのある好企画になりはしないか。

多くの官、学の若い研究者たちが、試験研究の対象として肥料に魅力を感じなくなっており、このままだと肥料のことのわかる研究者はいなくなってしまうのではないかと憂える。研究者が敬遠するだけでなく、最近では行政サイドからのしめつけで、民間からの委託試験を受け入れない試験機関が多くなった。肥料メーカーがもち込む場合はとくにきびしいと聞く、なぜか。

どうも委託試験が研究員の人員整理に利用されている節がある。委託試験をやってる余裕があるなら人を減らすということらしい。肥料には受委託あせん機関がないため、メーカーは自らもち込まざるを得ない。これが不都合というなら、農業のような整然たる委託試験のしくみ、体制をつくらなければならない。受託場所が少なくなれば特定の場所に集中し、ますます問題が大きくなるからだ。

肥料が分らずに施肥指導はできない。試験機関にとっても委託試験の意義は大きいはずである。折角の新肥料開発の芽を伸ばすためにも、交通整理が必要であると思う。